アクセントから文法へ

――品詞の辨別について――

秋永一枝

一　はじめに

アクセントの研究と文法學とでは、從來何ら連關性がないもののように思われがちであるせいか、アクセントをとり入れた文法書を殆ど見ることができない。強いて求めれば松下大三郎博士の「標準日本文法」[1]、橋本進吉博士の「國語法要說」[2]に散見するばかりである。專門があまりに分化しているために、關連のある問題を呈出しても充分に應用しきれないきらいがあるのだろう。

アクセントから文法にふれた論文としては、まず、金田一春彦氏の「國語アクセント史の研究が何に役立つか」[3]の第三章、「文法史の研究への發言」をあげねばならない。氏はここで「日本書記」・「類聚名義抄」・「古今和歌集」・「補忘記」などのアクセントの流れから、《いわゆる複合動詞というものは古代には明らかに二語の連續であったと考えられ、古代語の文典を編む場合には、二語として取扱うべきものと考えられる》こと、《古代―大體平安末期の助詞・助動詞は、現在のものとはちがい、もつと獨立性が高い自立語的なものであったと推定される》こと、《その聲點により、それが終止形であるか、連體形であるか知られるはずである》ことなどを述べておられる。

アクセントから活用形を推定できることは、古代アクセントを對象とした諸論文を參照すれば明瞭である。古代の複合動詞については、吉澤典男氏の論文[4]があり、現在の東京語を對照としたものではわずかに林大氏の「アクセント私見」[5]がある。氏は《單語に關してはアクセントもまた活用の一種》であり、《單語は、アクセント交替の體系の類型によつて分類されること、活用の類型によって用言が分類されるのと全く同樣である》とされた他、サ行變格の複合動詞、形容動詞について若干ふれておられる。[6]

他に「複合語」・「文節」に關しては、有坂秀世博士[7]、服部四郎博士[8]、柴田武氏[9]、金田一春彦氏[10]、坂倉篤義氏の諸論考において、斷片的な記述を見ることができる。

この他、アクセントの諸法則が詳述されている、三宅武郎氏の「音聲口語法」[11]や「漢語動詞のアクセント」[12]などの諸論文、佐久

間鼎博士の「日本音聲學」、宮田幸一氏の「ローマ字文法の輪郭」、永田吉太郎氏の「舊市域の音韻語法」[13]あたりの論考からも容易に文法への基礎理論をひき出してゆくことが可能である。これらは文法研究の一部とみるべきものと思われるが、一般の文法學とは没交渉である。

このように、關連があることのみはたびたび指摘されながら、また容易に利用できる材料が提供されているにもかかわらず文法論でとり上げられないのは、アクセント學の特殊性とも思われるので、アクセントからあれこれ思うままを拔き出してみた。ただしここでは、現代の東京語を對象に、東京アクセントで考察するのみにとどめたが、各地方のアクセントと方言文法との關係においても同樣である。

註

1 180頁～183頁

2 國語法研究 8頁～34頁

3 言語民俗論叢 333頁～340頁

4 「複合動詞について」日本文學論究第十冊

5 跡見學園紀要

6 「アクセントの型の本質について」國語音韻史の研究 397頁～409頁 など

7 「文節とアクセント」方言と土俗三・四

「音韻論 三」國語學29 など

8 「日本語のアクセント體系」國語學21

「アクセント論のために —金田一春彦氏に答える—」國語學29

9 「柴田君の『日本語のアクセント體系』を讀んで」國語學26 など

10 「複合語」など國語學辭典の諸項目

11 國語科學講座

12 コトバ再3の9

13 東京方言集

二

アクセントは時代により、更にその語のできた年代により異なって、時代時代の相をよく反映していると言える。アクセントはその品詞により、複合度により、グループ別にアクセントの特徴を示しているので、その語がどのグループに屬すか、または別のグループをたてなければならないか、他のグループにいつ轉成したか、いつ複合語となつたかを知ることができる。

從來、數詞及び固有名詞は、名詞の範疇に入れるのが定石である。數詞・固有名詞に助詞・助動詞がつく場合のアクセントは名詞に準じるが、その他の點、兩者は著しく名詞とアクセント體系を異にする。

數詞及び、**數詞＋助數詞**は、名詞に比して複合度が弱く、數詞を特に際立たせて明確に發音する傾向があるが、名詞においてはそれぞれ複合名詞のアクセント法則に從ったいかにも複合語的アクセントになる。

數詞	名詞
ヒトメ（一目。～會いたい）	ヒトメ（人目。～を避ける）
ヒトハダ（一肌。～拔ぐ）	ヒトハダ（人肌。燗は～）

ヒトヤマ（一山、〜百圓）　ヒトヤマ（人山。〜をきずく）
ヒトサライ（一淡い。〜淡う）　ヒトサライ（人攫い）
ヒトアタリ（一當り。〜當る）　ヒトアタリ（人當り。〜が良い）

その上數詞は、數詞それぞれの語の性質に執着し、古代の四聲を反映する。(2)

ヒトヤマ（一山）　フタヤマ（二山）
ヒトツズキ（一續き）　フタツズキ（二續き）
イチネン（一年）　サンネン（三年）　ゴネン（五年）
イチガツ（一月）(3)　サンガツ（三月）　ゴガツ（五月）

數詞から概念がはずれて名詞に轉成すると、一足飛びに名詞のアクセント法則に移行する。

三十五日　數詞　サンジュー・ゴニチ（〜を餘す）
名詞　サンジューゴニチ（〜の法要）
三尺　數詞　サンジャク（長さ〜）
名詞　サンジャク（＝帶）
七六　數詞　シチロク（〜四十二）
名詞　シチロク、シチロク（＝將棋など）

疊語・並立語においても數詞は複合度ゆるく、

ヒトツフタツ（一つ二つ）　ミッツヨッツ（三つ四つ）
ヒトリフタリ（一人二人）　フツカミッカ（二日三日）

となり前部成素のアクセントを生かす。はては長く延ばして「ゴーイチゴー、ゴーイチゴー（五・一・五）」「ニーニーロク（二・二・六）」などと、一一の數詞を際立たせて發音することなど、大きな特徴と言えよう。

數詞に接頭・接尾辭がつく場合でも同樣で、名詞のようには複合せず、

マキイチ　又は　マキ・イチ（卷一）
ダイゴ、　ダイ・ゴ（第五）
ジューエンジャク、ジューエン・ジャク（十圓弱）
ヒャクエンキョー、ヒャクエン・キョー（百圓强）

となり、これら數詞につくものを單に接頭・接尾辭の範疇に入れるのはどうか？と思われる。(4) この他、數詞は語中にあってもガ行鼻音化しない特性もあり、このようにアクセントの種類も複合度も異なるもの(5)を名詞に入れて品詞を同じくさせるのは、アクセントを考慮に入れてないからと思う。

固有名詞にしたところで、地名・姓・男女子名など、名詞とは異なったアクセント體系を作っている。（これは別稿にて詳述したい）

數・時・量をあらわす名詞・數詞は、**副詞的な用法**を持つが、この場合も副詞の中に含めないのが通例であるが、尾高型・中高型アクセントを平板型に變化させ、アクセントからみると完全な副詞といえる。この場合の用法は副詞に含ませてはどうであろうか。

夏　ナツ　→　ナツユク
昨日　キノー　→　キノーミタ
三つ　ミッツ　→　ミッツアル
十一　ジューイチ　→　ジューイチカウ
二回　ニカイ　→　ニカイアッタ
五人　ゴニン　→　ゴニンキタ

代名詞・數詞・連體詞・副詞の一部もアクセントの上からは、**疑問詞・指示詞**としてまとめる方がすっきりとする。

疑問詞を考えてみるに、すべてが頭高型をとる。

ダレ、ナニ、ドコ、イツ　（代名詞）
イクツ、イクラ、ナンド　（數詞）
ドー、ナゼ　（副詞）
ドノ、ドンナ　（連體詞）

また **特殊な形の擬聲・擬態語の類**（きまった語尾をもつもの。同じ語・相似した語が重複したもの）も、一方は形容動詞、一方は副詞と、同じ形のものさえ離れ離れになっていて、その用法から別の品詞に含まれたりするのはまずく、これもやはりまとめて說く方がアクセントの面からは體系立つ。

ぱっと、ぴかと、きらり、ぴったり、がたん、うららか、ほがら

確乎、斷々乎、莞爾、俄然、悠然

かんかん、ちらほら、せっせ、うらら、ほろろ、黑々

嬉々、懇々、悠々、爛漫、恍惚

但し、特殊な形をもたない形容動詞（親切・丈夫など）につく語尾の續きかたは、名詞に助動詞・助詞のつくアクセントと同樣なので、これらは名詞の方へ送りたい。

註1　それぞれの法則については、近刊の「日本語發音アクセント辭典（假稱）」を參照されたい。

2　これについては、金田一氏が研究を進めておられると伺う。

3　ガ～ゴは、ガ行鼻音を示す。

4　金田一氏は、この接頭辭は、連體詞に近いと言われたことがある。

5　例を上げれば、「ゴーク（業苦）」、「ダイゴ（醍醐）」は複合度強く、「ゴオク（五億）」は複合度それより弱く、「ダイゴ、ダイ・ゴ（第五）」は更に弱い。

三

このように、それぞれの品詞によりアクセントに特徴があるということは、裏返せば、語形の同じものの品詞を見分ける場合にも役立つことである。

動詞の中止形と、動詞からの**轉成名詞**との場合も語形が同じなので區別しにくいが、アクセントによって分類することが可能である。轉成語のアクセント法則として、轉成以前のアクセントの式を生かすという原則がある。

アソブ（遊ぶ）　→　アソビ（遊び）
ハタラク（働く）　→　ハタラキ（働き）
ヤスム（休む）　→　ヤスミ（休み）
ヒカル（光る）　→　ヒカリ（光）

また、それぞれの中止形は、活用形のアクセント法則により、「アソビ」、「ハタラキ」、「ヤスミ」、「ヒカリ」である。これは單獨では求めにくくても、助詞「て」をつけて、「アソビテ」、「ハタラキテ」、「ヤスミテ」と發音してみると明瞭である。

ユキワヨイヨイ・カエリワコワイ

の、「行き」「歸り」は、ともに轉成名詞の法則にあい、

ユキワシナイ、　カエリワシナイ

は、ともに動詞の中止形の法則に適合する。

中止形	轉成名詞
泣き　ナキ（〜などする）	ナキ（〜をみせる）
死に　シニャ（〜あしない）	シニ（〜に行く）
食い　クイ（どこかへ〜に行こう）	クイ（魚の〜が悪い）
降り　フリ（〜も降ったり）	フリ（〜が強い）

同樣に、「（どちらに）オスマイ（ですか）」は動詞であり、「オスマイ（はどちらですか）」は名詞である。これらをば、金田一京助博士は名詞に含めておられるようであるし、時枝誠記博士は「體言に轉換する用言」として、「わがせこが、ゆきのまにまに……」「大船を漕ぎのすすみに……」をあげておられる。「ユキノマニマニ」は動詞の中止形の場合も「の」がついて平板化し名詞と同アクセントになるので見極めにくいが、平板型「ユク」を起伏型「カク（書く）」にかえて發音すれば「カキノマニマニ」となり、「コギノススミニ」と同樣に動詞の中止形のアクセントである。まして古くは轉成していなかったに違いない。

金田一博士はこの他、「行くがよろしい」「行くにまさる」の「行く」を、「近く」「遠く」を、「善きに從う」「悪しきもあり」の「善き」「悪しき」を、轉成名詞とされておられるし、時枝博士は「春雨の降るは涙か……」の「降る」までを、「かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば……」の「白き」までを體言相當格と見ておられ、「こと」「もの」「の」が省略されたものではないとされていられるが、アクセントから考えると、これらはすべてまだ動詞であり、形容詞であつて、體言化していないもののように思われる。

では、疊語はどうであろうか。動詞連用形では、「ナキナキ（泣き泣き。〜歸る）」、「トビトビ（飛び飛び。〜行く）」「（汗を）カキカキ」などと複合度が弱いが、副詞になると、「トビトビ」「トリドリ」のように變化するし、名詞の疊語「トキドキ（時時。〜に應じて）」なども副詞では「トキドキ（〜行く）」と變貌する。

動詞に接尾「く」がついた場合も、

ノタマワク（宣わく）　イワク（曰く）　オイラク（老いらく）

であったものが、名詞に轉成すると、

イワク（〜がある）　オイラク（〜の戀）

と變ってしまう。

また、複合語の後部成素が、それだけ切りはなしてみて名詞であるか接尾辭であるかを推定することも可能である。

「儀式・數式」をあらわす名詞「式」がついた場合と「方法・標準・規定・樣式」などをあらわす接尾辭の「式」がついた場合とではアクセントが異なるのだ。前者は漢語複合名詞の法則により複合部にアクセント契機があり

ニューガクシキ（入學式）　ホーテイシキ（方程式）　エンギシキ（延喜式）

となるが、後者は接尾辭の法則に從い、この場合は平板型を作る。

ジドーシキ（自働式）　ガイコクシキ（外國式）

これと同様なものに「氏」を示す名詞の「氏」、敬稱をあらわす接尾辭の「氏」があり、同じ氏姓に續きながらアクセントが相違する。

徳川　トクガワシ（〜氏の出）　トクガワシ（〜に會つた）
毛利　モーリシ（〜氏に嫁す）　モーリシ（〜を紹介する）

一方は複合名詞のアクセントで複合部に契機があり、一方は固有名詞に續く「さん」「さま」「殿」などと同類のアクセントで前部成素を生かす。このような、もとの語に意味をそえる、敬稱・愛稱・複數をあらわす接尾辭は、前部のアクセントを生かす點において他の接尾辭と切りはなすべきではないかと思う。

また、その本來の意味が接頭的な指示詞に變化した場合にもアクセントの異なりがある。「同じ日」・「同じ年令」・「別館に對する本館」・「正式の官職」などの「同日」・「同年」・「本館」・「本官」は複合名詞のアクセント法則により平板型であるが、接頭的な指示詞となつて「その日」「その年」「その建物」「官吏の自稱代名詞」となつた場合は頭高型に變化する。

同日　ドージツ　ドージツ
同年　ドーネン　ドーネン
本館・本官　ホンカン　ホンカン

いちいちの說明を省くが、次のようなものなども、品詞や意味內容によつてアクセントが變化するものである。

堪能　名詞　タンノー、タンノー
　　動詞　タンノースル、タンノースル
將來　名詞　ショーライ（＝未來）
　　動詞　ショーライスル
遠慮　名詞　エンリョ（〜深謀）
　　動詞　エンリョスル
　　名詞　エンリョ（〜がある）
都合　名詞　ツゴー（〜が悪い）
　　動詞　ツゴースル
　　副詞　ツゴー（〜十人）
多分　名詞　タブン（〜に頂き）
　　副詞　タブン（〜來ないだろう）
何樣　名詞　ナニサマ（〜じゃあるまいし）
　　副詞　ナニサマ、ナニサマ

だが、アクセントによつて品詞の分類をする場合、最も重要なのは、助詞・助動詞と接尾辭との關係であろう。

一部の助詞に二樣のアクセントがあることは「明解國語辭典」「NHKアクセント辭典」「辭海」などに記載されているほか、諸氏の認めるところである。既に「NHKアクセント辭典」の後記では、アクセントにより「助詞性の助詞」と「接尾語性の助詞」とをわけている。私は更に進めて、前部のアクセントの型、或いは式を、複合の後も反映するものと、反映せぬものとにわけた。殆んどの助詞・助動詞は、前部のアクセントを反映するために、前者を助詞・助動詞に含め、意味をそえると共に他の品詞の資格をあたえる接尾辭の多くがアクセントを反映しないため、後者を接尾辭として、これを辨別の方法にした。

まず、助詞と接尾辭とを考えてみる。

「ゴト（毎）」は、「ぐるみ・いっしょ」の意をあらわすものと、「…のたびに・…のどれも」の意をあらわすものとをまとめて接尾辞にされている場合が多いが、アクセントからみた現段階では區別した方がよいようである。

「ぐるみ・いっしょ」の「ごと」は、アクセントの上ではもはやすっかり接尾的で

トリ（鳥）→トリゴト（〜煮る）
カワ（皮）→カワゴト（〜食べる）
ネギ（葱）→ネギゴト（〜焼く）

と、前部のアクセントに支配されていないが「…のたびに・…のどれも」をあらわす「ごと」は、前部のアクセントを反映する傾向が強く、反映しないアクセントが現在少しずつ進出しだしたという段階である。

ミズ（水）→ミズゴトニ
カワ（河）→カワゴトニ、カワゴトニ
フネ（舟）→フネゴトニ、フネゴトニ
マス（増す）→マスゴトニ（水が〜）
フル（降る）→フルゴトニ、フルゴトニ（雨が〜）

これは助詞が接尾辞に變化しつつあることを示すものであり、後者はまだ助詞にとどめた方がよかろう。

同様に「ナガラ（乍ら）」も、動詞につく場合は前部のアクセントを反映し、助詞に含めたいが、

ナク（泣く）→ナキナガラ
ヨム（讀む）→ヨミナガラ

名詞につく場合は三様を示し、これは接尾辞に移行しつつある途上と考える。

ジブン（自分）→ジブンナガラ、ジブンナガラ
オンナ（女）→オンナナガラ、オンナナガラ、オンナナガラ
ワレ（我）→ワレナガラ、ワレナガラ、ワレナガラ

その他「ダケ（丈）」、「グライ、クライ（位）」「ドコロ（所）」「バカリ」もやはり兩様を示すが、頭高型についた場合に接尾的アクセントになる傾向はまだ稀薄のようである。

「だけ」
トリ（鳥）→トリダケ
ハナ（花）→ハナダケ、ハナダケ
アメ（雨）→アメダケ、アメダケ
ナク（泣く）→ナクダケ
ヨム（讀む）→ヨムダケ、ヨムダケ

「ぐらい（くらい）」
トリグライ
ハナグライ、ハナグライ
アメグライ、アメグライ
ナクグライ
ヨムグライ、ヨムグライ

「どころ」
トリドコロ
ハナドコロ、ハナドコロ
アメドコロ、アメドコロ

ナクドコロ
ヨムドコロ、ヨムドコロ

「ばかり」
トリバカリ
ハナバカリ、ハナバカリ
アメバカリ、アメバカリ
ナクバカリ
ヨムバカリ、ヨムバカリ

これら助詞が、數詞及び數詞＋助數詞についた場合も同樣のゆれを示している。ただし「大體の數量」をあらわす「ばかり」はずっと接尾辭的アクセントを示している。

ヒャクエン（百圓）→ヒャクエンバカリ
ミッツ（三つ）→ミッツバカリ、ミッツバカリ
サンジュー（三十）→サンジューバカリ、サンジューバカリ
ゴエン（五圓）→ゴエンバカリ、ゴエンバカリ

次に、助動詞と接尾辭とを考えてみよう。

よく問題になる「ラシイ」は、接尾とされている「…にふさわしい」意の「らしい」と、助動詞とされている「…のようだ」という推量をあらわす「らしい」とでアクセントを異にするが、アクセントが品詞の區別に一致した點で興味深い。

「…にふさわしい」意の接尾辭「らしい」は、前部成素のアクセントを反映することがない。

センセイラシイ（恰好）
オトコラシイ（人）
（ちっとも）アメラシイ（雨が降らない）

だが、推量をあらわす「らしい」は、現在若い層では接尾辭的なアクセントが優勢であるが、それでもまだ、前部成素を反映する傾向が殘る。

（どうも）センセイラシイ（よ。）センセイラシイ（よ）
（男かしら？女かしら？）オトコラシイ、オトコラシイ
（あしたの遠足は）アメラシイ、アメラシイ

これは間に助詞が挾まれる場合も同樣で、

（彼女のどこに魅力を感じたんだい？）
（どうやら）アシニラシイ（よ）、アシニラシイ（よ）

これは、現段階ではやはり助動詞と考える。

また時枝博士[4]は「地に屆きさうな樣子」「悲しさうな顏」「うれしいさうです」の「ソー」をともに接尾語としていられるが、このアクセントは全く接尾辭的ではない。

ナク（泣く）→ナキソー（〜だ・か）
ヨム（讀む）→ヨミソー（〜だ・か）
アカイ（赤い）→アカソー（〜だ・か）
シロイ（白い）→シロソー（〜だ・か）
ナクソー（〜だ・か）
ヨムソー（〜だ・か）
アカイソー（〜だ・か）
シロイソー（〜だ・か）

私は「そう」と「だ」を切りはなして考えて、アクセントからみて前部と複合度の強い「泣きそう」「赤そう」の「そう」類を助動詞に、複合度の弱い「泣くそう」「赤いそう」の「そう」類を助詞としたい。

「タガル」は現在では殆ど接尾的アクセントだが、年輩の人では助動詞的に發音する傾向もかなりみられる。

ナキタガル、ナキタガル
ヤリタガル、ヤリタガル
ヨミタガル
カキタガル

「マス」は、アクセントの上からは全く接尾辭的であり

ナキマス　ヤリマス
ヨミマス　カキマス

のようになるが、接尾辭へ含めるのはまだいささか躊躇される。金田一氏は「不變化動詞の本質」[3]において《「です」も「ます」も丁寧の意味の助動詞とも考えないし、聞手に對する敬意を表わす助動詞とも考えない》と書いていられる。

これら動きつつあるものは、現在どのような傾向であるかを、そのアクセントに應じて幾樣にも考えてゆかないと、變遷してゆくもののありの儘の姿が摑めなくなり解決がつかなくなろう。だが便宜的には、どの傾向が一般的であるかによつて、「助詞がふさわしい」「助動詞に認めたい」「接尾辭である」などと發言できよう。どれを一般的傾向と定めるかは、發音者それぞれの年令、生育地域、個人差などを充分に檢討した上でなくてはならない。私としては、轉成語かどうかの點においては、轉成前のアクセントが殘つている場合は、まだ轉成を認めない方が無難だと思う。

註 1　「新國文法」57頁～59頁
　 2　「日本文法、文語篇」24頁～28頁
　 3　國語國文　22巻3號
　 4　日本文法　口語篇154頁～156頁

四　おわりに

以上、アクセントからはこうも考えられるということの一端を記したに過ぎない。勿論私としてもアクセント萬能主義をふりかざすつもりはさらさらなく、これからの文法論の基礎の一部として考えて頂きたいと思うのみで、御批判頂ければ幸である。

終に、諸先生の敬稱を省略したことをお詫びし、御指導頂いた金田一春彥先生にお禮申しあげる。